

# 日本語教育における教師間協働

— 韓国協働実践研究会での執筆・出版の取り組み —

金志宣\*

## <Abstract>

### Teacher collaboration in Japanese language education:

A case of writing and publishing by the Korean Collaborative Practice Research Society

This study reports on teacher collaboration in Japanese language education by presenting practical examples of collaboration among teachers based on the writing and publishing process of the *Handbook of Class Design and Practice of Collaborative Learning*, which is co-authored by members of the Korean Collaborative Practice Society. The study introduces the Society and its activities and briefly summarizes the process of writing and publishing the handbook. The handbook consists of three parts: Part I 'Collaborative Learning Factors', which discusses the factors to consider in collaborative learning; Part II 'Practical Cases of Collaborative Learning', which introduces cases of collaborative classes; and Part III 'Practical Researches on Collaborative Learning', which reviews practical researches on collaborative learning in secondary and high education in Korea. The handbook aims to enhance the understanding of collaborative learning and enable the class design and practice of collaborative learning. The study applied the plan-do-check-act (PDCA) cycle as a dissemination plan for using the handbook and suggested implications for the continuous development of teacher collaboration by examining the overall activities of the Korean Collaborative Practice Society. It is expected that the study will provide clues for pursuing ways of collaboration among teachers as a process of sharing and creating practical intelligence.

Field : Japanese Language Education

Keywords : Teacher collaboration, Practical intelligence, Korean Collaborative Practice Society,  
Handbook of Class Design and Practice in Collaborative Learning

## 1. はじめに

教師間協働は、広義では「個々の教師が自律性と相互信頼をベースとして知識や意味を共有し、またその相互作用を通じて新たな知識を創造していくプロセス」(藤原1998:4)と捉えられる。教師が相互に知識や経験を交換して共有し、他者の目によって自分の実践や経験を相対化させ、再構成したり新しい解釈を生み出したりすることで、より豊かなものにしていくということである。一方、日本語教育

\* 梨花女子大学 人文科学大学 副教授、日本語教育

における教師間協働は、「複数の教師が日本語教育の現場（教室、組織・機関、地域等）で問題解決や目標に向かって協力し、互いに学び、成長すること」（中山 2016:80）とされるが、一般には日本語学校などの予備教育機関や大学の教育現場におけるティーム・ティーチングを指すことが多いようである。そのため、日本語母語話者（日本人教師）と非母語話者（現地人教師）によるティーム・ティーチングに主眼を置いた研究が進められている。タイ人教師と日本人教師の協働（香月 2011；片桐他 2011；池谷他 2012；中山他 2015）、日本・韓国・タイ・ベトナムでの教師間協働（高橋他 2012；中山他 2011）、日本国内での日本語母語話者と非母語話者教師の協働（辛 2013）などがあり、最近では日本語母語話者の教師間協働に焦点を当てた研究（池谷他 2018）も見られるようになった。

韓国国内の場合、日本語母語話者（日本人教師）と非母語話者（韓国人教師）が一つの授業をティーム・ティーチングの形で進めることより、それぞれに振り分けられた授業を別々に受け持つことが大半を占めている。たとえば、日本人教師は会話や作文など実用的な科目を、韓国人教師は文法など理論的な科目を各々担当するといった具合である。つまり、母語話者であれ非母語話者であれ、教師同士で授業の中身について話し合ったり協力したりするような相互作用の機会ほとんどないということである。日本国内のティーム・ティーチングにおける母語話者と非母語話者教師の連携・協力は、業務や授業の単純な役割分担に過ぎない（辛 2013:293）との指摘もあるが、韓国においては日本語授業の担当科目をはじめ、担わされる役割がほぼ決まっているうえに、ティーム・ティーチングもほとんど行われていないため、授業をめぐる教師間協働の必然性がさほど高くない状況にあるものと思われる。しかし、その代わりというわけではないが、日本語・日本語教育関連の研究会を通じた交流や活動などの教師間協働はわりと盛んであるように見受けられる。本稿で取り上げる韓国協働実践研究会をはじめ、韓国OPI研究会、韓国継承日本語教育研究会、韓国日本語文化研究会、韓国日本語教育研究会、韓国日本語研究会、日韓コミュニケーション研究会、日本語音声研究会など、各研究会の会員を中心としてさまざまな形の協働が行われている。

そこで、本稿では、教師間協働の一試みとして行ってきた、韓国協働実践研究会での執筆・出版の取り組みについて報告する。このような事例紹介を通して、教師間の実践知の共有・創造のプロセスとしての協働の意義を探るとともに、教師間協働のあり方への示唆を得たい。以下では、協働実践研究会の設立の背景・理念と、これまでの韓国協働実践研究会の主な活動内容を報告し、そこでの問題意識をもとに進めてきた共著『協働学習の授業デザインと実践の手引き - 韓国の日本語教育の現場から』の執筆・出版の取り組みと、本書の特徴を述べる。さらに、本書の手引きとしての意義を踏まえ、その有効活用に向けた今後の方向性について展望する。

## 2. 協働実践研究会について

### 2.1 設立の背景と理念

「協働実践研究会」は、日本語教育の分野で協働学習に取り組んできた協働実践研究者たちにより、日本国内の日本語教育における協働学習（ピア・ラーニング）の実践と研究を推進していく拠点として、2010年に東京を本部として設立されたものである。海外拠点（支部）は、日本語学習者の多い韓国、中国、台湾をはじめ、タイ、モンゴル、マレーシア、インド、キルギス、インドネシア、ベトナムへと拡大され、アジアを中心とした海外ネットワークを構築しつつある（池田 2019:1）。研究会の

目的は、日本語教育において協働の考え方に基づく実践研究を進めていくこと、そして日本国内と海外拠点との連携の中で重層的かつ相互的関連性を持ちながら発展していくという有機的な展開が可能となる組織化を目指すことである。そのための課題として、(1)教師間の協働、教師と他専門家との協働など、教育現場における協働の実践研究と理論構築、(2)ピア・ラーニングの実践研究と理論構築、(3)上記の研究を進めるためのネットワーク作りを挙げている<sup>1)</sup>。

## 2.2 韓国協働実践研究会での問いと活動内容

「韓国協働実践研究会」は、2010年に日本協働実践研究会が設立されて間もなく、各国ネットワークのプラットフォームの一つとして立ち上げられた。本研究会は、発足以来1、2ヶ月ごとに会合を開き、協働学習の理論・実践について多角的に検討する場を設けており、2010年10月から2019年12月現在まで60回余りの勉強会・教師研修を行ってきた。これまでの道のりは、研究会のあり方や進むべき方向、運営上の問題などをめぐる試行錯誤と創意工夫の連続であり、今なおその渦中にある。それなればこそ、その軌跡を省み、研究会を継続してきた原動力とは何か、そこで何を考え、学び、得られたかを問い直すことが、これから歩んでいく道の礎になるのではないかと思われる。つまり、その軌跡とは、研究会を貫く問いとその解を協働で追究してきたプロセスということができる。その問いは、次の三つにまとめられる。

- 1) 「協働」「協働学習」とは何か
- 2) 「協働学習」をいかに実践するか
- 3) 「協働学習の実践知」をどのように共有・活用できるか

初期は、協働の概念または基本要素をめぐる疑問の出し合いに始まり、その糸口を文献講読に求めている。これは単に理論上の概念や原理に限られることなく、各メンバーが実際に行っているグループ活動が協働学習といえるものなのかという実践に関わるものでもある。そのため、参考文献・論文の輪読と並行し、メンバー自身が行った協働学習の事例についても検討した。また、日本協働実践研究会の先生方を招き、「協働学習の理論と実践」についての講演会やワークショップをしてもらうなど<sup>2)</sup>、さまざまなリソースをもとに議論を重ねていた。本研究会はそもそも、「学習者自ら考え、ともに学ぶ」ことを重視する協働の精神に共鳴した人たち（現職日本語教員や日本語教育関係者）が集い、協働学習をより促進・支援する学習デザインと実践を目指したものである。したがって共通の目的や問題意識も当然あったが、一方、協働学習に対する個々人の理解や解釈をはじめ、授業実践における協働学習のねらいややり方が異なり、よってそこでのこだわりや悩みもさまざまであった。一見まとまりのなさそう

1) 協働実践研究会 (<http://kyodo-jissen-kenkyukai.com/>)

2) 2011年6月25,26日 韓国協働実践研究会主催 講演会・ワークショップ「協働学習の理論と実践」(池田玲子・金孝卿)

2013年12月7日 韓国日語教育学会第24回国際学術大会 招待講演「日本語教育のピア・ラーニング-創造的学びの理論と授業デザインの実践」(池田玲子)

2013年12月8日 韓国日語教育学会主催 ワークショップ「ピア・ラーニングの授業デザインの実践-移行期から発展へ」(池田玲子・トンプソン美恵子・房賢姫)

2015年12月5日 韓国日語教育学会第28回国際学術大会 招待講演「日本語授業における協働の学びの場のデザイン-なぜ協働するのか」(館岡洋子)

なその過程でそれぞれの認識と経験を共有し、互いの授業実践を改めて見つめることで、自分なりの協働観を捉え直すためのヒントが得られたのではないかと考えられる。すなわち、「なんのために」協働学習を取り入れるのか、「どうすれば」協働学習の基本要素を上手に組み入れてより効果的・有意義な学習につながれるかといったことを、自分の授業に引きつけて考え、授業（活動）デザインに反映していく素地が作れたということである。そして、その成果は論文や発表の形で数多く報告されている<sup>3)</sup>。

このような協働学習の理論・実践をめぐる議論や取り組みが続く中、次第に参加メンバーの伸び悩みや研究会活動の形骸化への懸念などの問題が見え隠れし、研究会の持続可能なあり方や活性化を模索する必要性に迫られるようになった。研究会の立ち上げから5年余り経った頃のことである。当時、メンバー同士の話し合いにより、本研究会の一次総括として、これまでの活動の成果内容を形にして残すという方向に進んでいった。こうして出版の話が持ち上がり、2016年4月、37回目の研究会から本格的な話し合いが始まった。韓国の日本語教育において協働学習の授業実践や実践研究が徐々に増えてはいるものの、限られた数人の取り組みの蓄積に頼る面が大きく、さほど広く深く浸透しているとは言い難いのが現状である。その背景には、超競争社会といわれる韓国内の厳しい現実のほか、大学などの教育現場で依然として主流をなしている教師主導型教育や相対評価制度ゆえに、仲間を協働の存在ならぬ競争の相手として見てきた認識が根強く残っていることが挙げられる。さらに、日本語教育の協働学習に関する韓国内の文献が皆無であることも一因であろう。これらの事情を周知していた研究会のメンバーは、協働学習の理論と実践についてもっと知ってもらい、授業実践につないでいけるような手引きが重要ではないかということで意見を収斂した。本研究会を通じて体験的に培った知見を一冊の本としてまとめることで、協働学習の実践知を共有し、さらなる普及に一助できると思い至ったのである。こうした経緯で、共著『協働学習の授業デザインと実践の手引き - 韓国の日本語教育の現場から』の執筆作業に取り掛かることになり、執筆・出版に向けた計画から作成、推敲に至る全過程が協働で押し進められた。

### 3. 韓国協働実践研究会での教師間協働—『協働学習の授業デザインと実践の手引き—韓国の日本語教育の現場から』の執筆・出版

#### 3.1 本書の目的と構成

『協働学習の授業デザインと実践の手引き - 韓国の日本語教育の現場から』の趣旨は、協働学習について関心はあってもあまり知らない方、知っていても実践に苦労している方、これまでの実践に改善を図ろうとしている方々を读者と想定し、協働学習についての理解を深め、有意義な協働学習の実践が行えるよう手助けすることである。さらに、現職の日本語教員や日本語教員養成の教員、日本語教員を目指す大学院生などにとって、自らの教育と実践のあり方を考える機会となることもねらいの一つとしている。そのため、協働学習の授業づくりに必要な項目を取り上げてなるべく分かりやすく概説したうえ

3) 岩井・中川(2017)、金志宣(2012, 2015, 2017, 2018, 2019)、金志宣・趙宣映(2017)、倉持(2010, 2012, 2014a, 2014b, 2018)、倉持・奈呉(2011)、倉持・奈呉・関(2015)、齊藤(2012, 2014a, 2014b)、角・大田(2017)、関(2017)、趙宣映(2018)、奈呉(2010a, 2010b, 2011)など

で、韓国の日本語教育における実践事例を紹介し、実践研究をレビューしてまとめるという三部構成に仕上げられた。なお、本書の「はじめに」と「おわりに」は、日本協働実践研究会の共同代表である池田玲子氏と館岡洋子氏に各々執筆してもらい、本論の各章は韓国協働実践研究会のメンバーにより作成された。表1に各章の題目と執筆者を記す。

＜表1＞本書の構成

はじめに	第二言語としての日本語教育の協働学習（ピア・ラーニング） … 池田玲子
第Ⅰ部 協働学習の 授業づくり	1. 協働学習の目的と基本要素 … 奈呉真理 2. グループの作り方 … 倉持香 3. アイスブレイク … 岩井朝乃 4. 評価 … 関陽子 5. 内省活動 … 金志宣 6. 【座談会】教師から見た協働学習
第Ⅱ部 協働学習の 実践事例	1. 音声吹き替えを利用した協働授業実践 … 関陽子 2. マインド・マップを活用した授業 … 奈呉真理 3. ポスター発表を取り入れた授業 … 金志宣 4. ネット上の掲示板を利用した授業 … 趙宣映 5. 異文化間コミュニケーション授業の協働学習 ープロジェクト学習でのグループ内の役割 … 岩井朝乃 6. 内省活動を組み込んだ授業 … 金志宣 7. 初級日本語クラスでのグループ作り … 倉持香 8. 就職関連授業の事例 … 角ゆりか・大田祥江 9. SNSを利用した日韓交流学習における教師の協働 … 岩井朝乃 10. オンライン学習システムを活用した協働学習 … 齋藤明美
第Ⅲ部 協働学習の 実践研究	韓国における日本語協働学習 … 倉持香・趙宣映
おわりに	協働学習実践の動向と展望 … 館岡洋子

理論編にあたる第Ⅰ部「協働学習の授業づくり」では、協働学習の授業や活動の際に考慮すべきことについて、各々の基本概念や技法、その例などがやや網羅的に述べられている。授業実践に先立ち、授業（活動）デザインで押えておくことをイメージしやすくするためである。各章を概略すると<sup>4)</sup>、効果的な学習になるように把握しておくべき「1.協働学習の目的と基本要素」では、何のために授業に協働学習を取り入れるのか、どうしたら協働学習を促進できるのかをまとめている。各種グループの長短所を踏まえて行すべき「2.グループの作り方」では、グループを作る時、何を一番大切に考えたらいいか、メンバーの人数や日本語レベルなどは誰がどのように決めたらいいかについて述べている。また、初対面のメンバー同士が打ち解け合うための「3.アイスブレイク」では、アイスブレイクとは何かを概観し、日本語教育に取り入れやすいものを紹介している。協働学習の過程や結果をできるだけ客観的に評価するための基準作りを示した「4.評価」では、学びのプロセスを重視する協働学習の評価方法とし

4) 概略は、『協働学習の授業デザインと実践の手引き－韓国の日本語教育の現場から』の「本書の構成」の記述と、各章の冒頭部から引用した。

て、ルーブリックを活用した評価を取り上げている。自己の学習体験を振り返ることで新たな学習を生む「5.内省活動」では、内省とは何か、なぜ必要か、どのようにしたらいいかなど、内省活動のデザイン・実践上の留意点について述べている。さらに、「6.教師から見た協働学習【座談会】」では、協働学習の困難や意義について、執筆者それぞれが実践を通して感じたことを話し合った内容がまとめられている。

実践編の第Ⅱ部「協働学習の実践事例」は、本研究会のメンバーがこれまで実践してきた協働学習を紹介する事例集である。共通の枠組みは、図1の事例からも分かるのように、[活動概要]と[使用教材・機器・教具]を示し、[1]活動(授業)の目標と[2]活動(授業)の流れに続いて、[3]活動のポイントと学習効果]を詳述し、最後は[4]学習者の感想・意見]と教師による[5]活動を振り返って]で締めくくっている。

<h2 style="text-align: center;">6. 内省活動を組み込んだ授業</h2> <div style="background-color: #cccccc; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center; font-size: small;">個別内省、内省シェアリング、メタ内省という一連の内省活動を組み込んだ日本語授業です。</p> </div> <p><b>活動概要</b></p> <p>学習者数：4-5人グループ・全20-25人 日本語レベル：上級 活動形式：対面学習及びオンライン学習</p> <p><b>活用教材 機器 教具</b></p> <p>教室のパソコン ビーム・プロジェクター 大学の学習支援システム「Cyber Campus」 ニュースの聴解資料 スクリプトシート、ワークシート、内省シート</p> <p style="font-size: x-small; margin-top: 20px;">136 協働学習の授業デザインと実践の手引き</p>	<h3>1) 授業の目標</h3> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 日本のニュースを題材に、日本語の語彙や文型、表現などの言語知識を習得し、聴解力や読解力、コミュニケーション能力などの言語スキルを身につける。</li> <li>(2) ニュースの背景知識や現状を知ったうえで、批判的に捉える。</li> <li>(3) 内省活動を通して内省活性化を促し、内省力を育む。</li> </ol> <h3>2) 授業の流れ</h3> <p>授業は、トピックごとに「事前課題」「全体活動」「ピア活動」「内省活動」の順に進められます。</p> <div style="margin-top: 10px;"> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; text-align: center;">(1) 事前課題</td> <td style="padding: 5px;">← 各自ニュースの聴解、スクリプト作成</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; text-align: center;">(2) 全体活動</td> <td style="padding: 5px;">← ニュース聴解、スクリプト確認 内容理解、日本語語彙・文型・表現の学習 シャドーイング、穴埋め、韓日訳 ニュースの背景・現状・関連情報の紹介</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; text-align: center;">(3) ピア活動</td> <td style="padding: 5px;">← グループごとのシャドーイング スクリプトの相互検討・修正、質問・応答 (聞き間違い、表記、意味、表現など) 当該トピックについての話し合い</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; text-align: center;">(4) 内省活動</td> <td style="padding: 5px;">← 学習体験の振り返り 内省シート作成またはオンライン上で入力 協働的内省活動の段階的導入 (個別)内省→内省シェアリング→メタ内省</td> </tr> </table> </div> <p style="font-size: x-small; margin-top: 20px;">第Ⅱ部 協働学習の実践事例 137</p>	(1) 事前課題	← 各自ニュースの聴解、スクリプト作成	(2) 全体活動	← ニュース聴解、スクリプト確認 内容理解、日本語語彙・文型・表現の学習 シャドーイング、穴埋め、韓日訳 ニュースの背景・現状・関連情報の紹介	(3) ピア活動	← グループごとのシャドーイング スクリプトの相互検討・修正、質問・応答 (聞き間違い、表記、意味、表現など) 当該トピックについての話し合い	(4) 内省活動	← 学習体験の振り返り 内省シート作成またはオンライン上で入力 協働的内省活動の段階的導入 (個別)内省→内省シェアリング→メタ内省
(1) 事前課題	← 各自ニュースの聴解、スクリプト作成								
(2) 全体活動	← ニュース聴解、スクリプト確認 内容理解、日本語語彙・文型・表現の学習 シャドーイング、穴埋め、韓日訳 ニュースの背景・現状・関連情報の紹介								
(3) ピア活動	← グループごとのシャドーイング スクリプトの相互検討・修正、質問・応答 (聞き間違い、表記、意味、表現など) 当該トピックについての話し合い								
(4) 内省活動	← 学習体験の振り返り 内省シート作成またはオンライン上で入力 協働的内省活動の段階的導入 (個別)内省→内省シェアリング→メタ内省								

3) 活動のポイントと学習効果

- ・学習活動のうち、内省活動を中心に紹介します。例えば『時事日本語』授業における内省活動は、「個別内省」「内省シェアリング」「メタ内省」のような順で段階的に進められます。
- ・コースの前半は内省シートを用いた個別内省のみを行い、後半は個別内省と並行して内省シェアリングをし、そして最後にメタ内省をもって締めくくります。

(1) 個別内省

- ・内省とは、自分の学習体験について新たな理解や評価を見出すために、その体験を探る認知的・情意的活動のことです。つまり、授業で何を学んだか、活動ではどんなことが行われ、自分は何をしていたのだろうか、また何を考え、感じたかを、注意深く吟味することをいいます。
- ・自分を見つめることに慣れておらず負担を感じる学習者のために、次のような内省項目が記された内省シートを用意し、何をどう考えればいいのか分かるようにします。
- ・内省内容を言葉にして外化することで、自らの思考や感情がまとめられるようになります。その際、韓国語か日本語、書きやすいほうにしましょう。
- ・教室外活動(宿題)か教室内活動(授業中)、どちらでもいいんですが、なるべく十分な時間を与えるようにしましょう。

【内省シート】		名前 ( )
10. 資料自読準備		
1) 授業前：教材の理解度を確認		
何が、どの程度まで理解できたか	より深く理解するために、どの部分を読み直したか	
2) 授業中：教材の理解度を深める		
何が、どの程度まで理解できたか	より深く理解するために、どの部分を読み直したか	
3) 授業後：コースの内容や体験、感じたい、気になったことなどについて振り返る		

学習効果

- ・事前課題から全体活動、ピア活動までの学習活動に対する個別内省を通して、内省そのものへの意識化を図ります。
- ・自分の学習体験をありのまま直視し、その出来具合や満足度に焦点を当てて評価し、それを言語化して外化するということが意識的に行えるようになります。

(2) 内省シェアリング

- ・内省シェアリングとは、学習者同士で内省内容を共有する活動のことです。オンライン上の学習支援システムなどを活用して学習者個々人の内省を入力するようにし、みんなで共有します。さらに、他の人の内省についてコメントを書く活動を加えてもいいでしょう。
- ・内省シェアリングの際、次のような内省項目を与えますが、気

- ・思考への自覚や批判的思考態度を持つことにつながります。

4) 学習者の感想 意見

- ・自分がどのように考えているか、どんな人間なのかを知ることができ、一人の人間として成長するきっかけを生み出せる。
- ・内省シートの様式が決まっていたので、同じような内容を書くことが多かった。
- ・内省のため繰り返し考えることで、自分の言いたいことは何か、立場はどうか、段階的に根拠を見つけ出して述べられるようになった。
- ・授業中には気づかなかった自分の意見の矛盾点などに気づくことができ、自分の視野や考え方が広がった。
- ・自分の長所や短所を知るよい機会になったが、実際にどうしたら改善できるのか分からなかったり、改善に至っていないこともあった。
- ・内省共有によって知識と思考の幅が広がり、より効率的で深い学びができる。
- ・気づきや学びを言葉にすることで整理でき、今後の基準や計画を立てるのに役立つ。

5) 活動を振り返って

個別内省・内省シェアリング・メタ内省のような一連の協働的内省活動により、学習者には内省そのものに対する意識が芽生え、内省の効果や影響をも認識するようになったのではないかと考えられます。しかしこれらの効果が得られるためには、学習者がより能動的に内省していきけるまで、ときには教師の引っ張りが必要なのかもしれません。また、教師のフィードバック(内省へのコメントなど)も動機づけになるでしょう。このような内省活動を行ううえで大事なことは、単発的にやっただけで終わるのではなく、段階的かつ持続的に進め、とにかく最後までやり遂げることにあるように思えます。そうすることで、教師のサポートという足場を取り外しても学習者が自らの学習を内省しつつ、それを反映して自律的学習に向っていきけるのだと思います。

実践事例の中には、わりと手軽に短時間でできる活動もあれば、1学期を通して行うような込み入った活動もあり、またその内容も多岐にわたっている。事例の内容を簡単にまとめると<sup>5)</sup>、「1.音声吹き替えを利用した協働授業事例」は、アニメの音声吹き替えという学習者が興味を持って取り組める素材を活用したもので、学習者が自分たちの声で吹き替えをし、映像を編集する活動の事例である。「2.マインド・マップを活用した協働活動」は、マインド・マップを活用し旅の計画を立てるもので、メンバーが共通して行きたい所を選び、何がしたいか、なぜしたいかを動詞(たい)・形容詞で表現する活動である。「3.ポスター発表を取り入れた授業」は、グループで興味のあるテーマを選び、ブックトークの内容をもとにポスターとスクリプトを作成し、発表する協働活動を行う授業である。「4.ネット上の掲示板を利用した授業」は、日本の「今」に関する話題について、グループごとにネットで検索したり、内容と意見をネット上の掲示板を利用して共有する活動を行う授業である。「5.異文化間コミュニケーション授業の協働学習-プロジェクト学習でのグループ内の役割」では、プロジェクト型の協働学習でグループ内の役割を決め、効果的に協働学習を行うための仕組み作りを紹介している。「6.内省活動を組み込んだ授業」は、個別内省、内省シェアリング、メタ内省という一連の内省活動を組み込んだ授業である。「7.初級日本語クラスでのグループ作り」では、教養科目の初級クラスにおいて、専攻が異なる学生たちをどのようにグループ分けしたらいいか、グループ作りの事例を紹介している。「8.就職関連授業の事例」は、就職活動における面接や書類作成の土台となる「自己分析」をペアかグループで協力して行うことで、より客観的な分析が行えるようにする活動である。「9.SNSを利用した日韓交流学习における教師の協働」では、韓国の大学の日本語教室と日本の大学の韓国語教室をつないだ交流学习において、教師の協働と学習デザインに焦点を当てて紹介している。「10.オンライン学習システムを活用した協働学習」は、オンライン学習システムを活用して発表の手順や方法を事前に学習し、それをもとにグループで会議を行い、興味のあるテーマについて発表する協働活動である。当然のことながら、授業によって学習環境や学習目標、学習者の特性などが異なり、ひとつとして同じ授業は存在しない。そのため、さまざまな内容の実践事例を紹介することになったわけだが、読者にとってはこれらの事例を参考とし、自分の授業に適した協働学習の授業デザインを工夫したり改善するのに役立つものと思われる。つまり、本書はその名のとおり、協働学習の授業デザインと実践に力添えをしたり働きかけたりすることを目的とし、教育現場で実践的な手引きとして活用できることを意図して企画されたものなのである。

さらに、第三部「協働学習の実践研究」では、韓国の中等・高等教育機関における日本語協働学習の実践研究をレビューし、領域別にまとめて概観している。これまでどのように実践が行われ、そこにどんな発見が見られたのか、そして導き出された提案や課題は何かなど、その特徴を述べている<sup>6)</sup>。そうすることで授業実践研究の動向がつかめると同時に、授業実践で得られた知見を実践研究として発表し共有していける下地を提供しようとしたのである。

これら第I、II、III部の各章は、単に章立てを決めて分担して書いたものを寄せ集めたものではなく、各自受け持った章の原稿を研究会を通してみんなで検討し、数回ピア・フィードバックを受けて書き直すといった協働作業で仕上げられたものである。

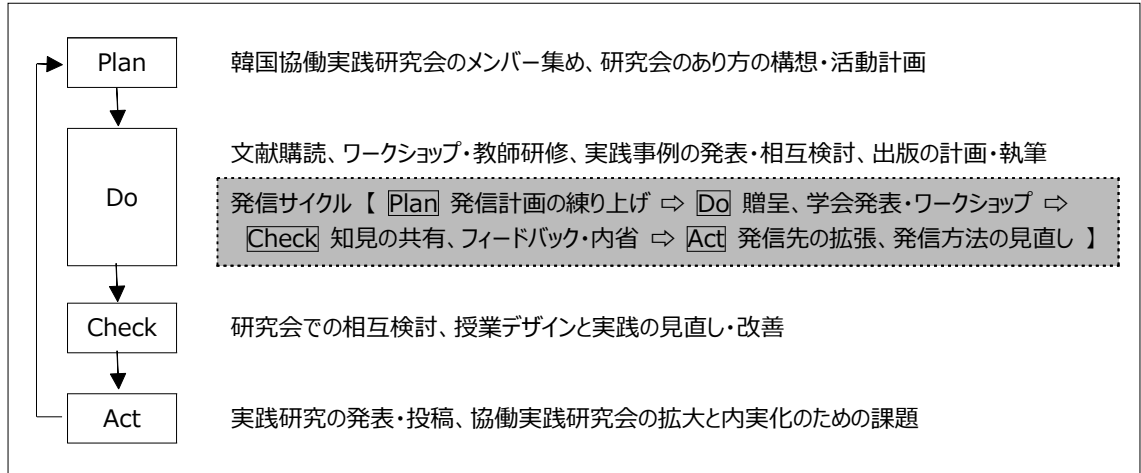
5) 第II部の各実践事例の冒頭部から引用した。

6) 第三部の「韓国における日本語協働学習」の冒頭部から引用した。

### 3.2 本書の有効活用に向けて

ここでは、本書の有効活用に向けた発信の段階と、それを推進する研究会の方向性について、PDCA サイクル「Plan（計画）-Do（実行）-Check（検証）-Act（改善）」に当てはめて考えたい（図2）。まず、発信の段階では、【 Plan 発信計画の練り上げ ⇨ Do 贈呈、学会発表・ワークショップ ⇨ Check 知見の共有、フィードバック・内省 ⇨ Act 発信先の拡張、発信方法の見直し 】のような発信サイクルが考えられる<sup>7)</sup>。そのうち、Doの取り組みの一つとして、学術大会<sup>8)</sup>の企画発表セッションで「韓国の日本語教育における協働学習」に関する五つの口頭発表を行っている<sup>9)</sup>。また、当日、会場の一角に日本・韓国協働実践研究会のブースを設け、研究会のことを知ってもらえるような資料や書籍など成果物の展示を行うことで、協働学習への関心と参加への動機を引き立てるよう図った。

さらに、本研究会の活動全体を眺めてみると、上記の発信サイクルが埋め込まれたより大きなサイクルがあるように見受けられる。つまり、図2に示した【 Plan 韓国協働実践研究会のメンバー集め、研究会のあり方の構想・活動計画 → Do 研究会の活動：文献購読、ワークショップ・教師研修、実践事例の発表・相互検討、出版の計画・執筆 → Check 研究会での相互検討、授業デザインと実践の見直し・改善 → Act 実践研究の発表・投稿、協働実践研究会の拡大と内実化のための課題 】のようなサイクルの中に埋め込まれた発信サイクルということである。このサイクルは研究会の活動全般にかかわるもので、重層的に連なった形で循環される。これらのプロセスは当然、本書の執筆者によって進められるが、その実現に向けた協働作業は今後の課題として残されている。



<図2>PDCAサイクル

7) 図2の、色塗りし点線で囲んだ部分を指す。

8) 韓国日本語教育学会・協働実践研究会（日本）共同開催2019年度冬季国際学術大会（2019年12月7日）

9) 口頭発表の題目と発表者は、「韓国協働実践研究会における教師間協働 - 『協働学習の授業デザインと実践の手引き』作成の試み」（金志宣）、「韓国における日本語協働学習 - 実践研究に焦点をあてて」（倉持香）、「韓国における日本語協働学習研究Ⅱ - インターネットを介する協働学習を中心に」（趙宣映）、「協働学習による異文化間教育の実践 - 2018年のKorea Japan Language and Culture Exchange について」（齊藤明美）、「協働学習の評価 - ルーブリックを活用した評価実践例」（関陽子）である。

上記のPDCAサイクルの重層的構造を分かりやすく示すと、図3のようになる。このように、本書を軸として協働学習の実践知の共有を図りながら仲間の輪を広げ、相互交流を通して得られた批判的な視点からの議論を深めていくことで、そこでの気づきや学びを授業デザインと実践の改善に生かせるのであれば、本PDCAサイクルをスパイラルアップしていける可能性も高くなることが期待される。こうした教師間協働のプロセスは、内省的実践家としての教師の資質や力量を育むうえでも欠かせないものではないかと思われる。



〈図3〉研究会の活動全般のPDCAサイクル（左図）および発信サイクル（右図）

#### 4. おわりに

以上、韓国協働実践研究会の活動内容をまとめ、本研究会のメンバー間協働による共著『協働学習の授業デザインと実践の手引き - 韓国の日本語教育の現場から』の特徴と、発信の取り組みを紹介した。今後、PDCAサイクルの構築と実現に際し、メンバーのさらなる成長と研究会の活性化とともに、海外ネットワークと連携した新たな転換を図っていく必要がある。振り返ってみると、浮き沈みはあったものの、本研究会の活動がここまで続けてこられたのも、また3年以上の協働作業がこうして著作の形で実を結んだのも、労力をいとわないコアメンバーとその支えとなったメンバーたちの底力が功を奏したことといえる。そうであるからこそ、このつながりをいかに強固にして持続的成長へと結びつけるのが最も肝要であり、それは即、研究会での教師間協働の維持・発展にもかかわることであるため、今後の重要な課題の一つとして位置づけられる。最後に、本書の「推薦のことば」の一部を記し、本書によって学習者間協働はもとより教師間協働の有効な手がかりが得られることを願って、本稿の結びとしたい。

本書は、韓国協働実践研究会メンバーが中心となって、グローバル社会を見据えた韓国の日本語教育の一方方向を示唆する「協働学習」について、その基盤理論と実践の内容を編集した本です。日本語教

育のみならず、多くの教育実践研究者たちが、本書をもとに、今後、協働学習をさらに広く、深く追究すると同時に、多様な教育環境における協働学習の有用性を探るための貴重な専門書となることが期待されます<sup>10)</sup>。

## 【参考文献】

- 池谷清美・Kanokwan Laohaburanakit KATAGIRI・片桐準二(2012)「タイ国高等教育機関におけるタイ人教師と日本人教師の協働観の比較—PAC分析からの考察」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』9 国際交流基金バンコク日本文化センター pp.29-38
- 池田玲子(2019)「日本語教育の協働学習の広がり—アジアのグローバル化を背景として」『韓国日語教育学会2019年度冬季国際学術大会(第36回) 予稿集』韓国日語教育学会 pp.1-4
- 池田玲子・舘岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 岩井朝乃・中川正臣(2017)「SNSを利用した日韓交流学習における教師の協働—日本語教育と韓国語教育の連携」『韓国日語教育学会2017年度国際学術大会(第31回) 予稿集』韓国日語教育学会 pp.145-150
- 片桐準二・Kanokwan Laohaburanakit KATAGIRI・池谷清美・中山英治(2011)「タイ高等教育の日本語教育協働現場における『成長する教師』の可能性—タイ人教師が経験する協働現場の実態分析からの考察」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』8 国際交流基金バンコク日本文化センター pp.35-44
- 韓国協働実践研究会編著(2020)『協働学習の授業デザインと実践の手引き—韓国の日本語教育の現場から』學古房
- 金志宣(2012)「自律性の支援に向けたピア・ラーニングの実践と意義—内省ピア活動の分析」『日本文化研究』43 東アジア日本学会 pp.93-112
- \_\_\_\_\_ (2015)「ピア・ラーニングにおける内省シェアリングの試み—内省活性化に向けて」『日本語文學』71 日本語文学会 pp.117-142
- \_\_\_\_\_ (2017)「授業実践における内省活動の検討—日本語・日本文化の授業を対象に」『比較日本学』40 漢陽大学校日本学国際比較研究所 pp.341-361
- \_\_\_\_\_ (2018)「日本語授業における協働的内省活動の実践報告—能力・資質の育成に向けた内省活動の可能性」『日本研究』77 韓国外国語大学校日本研究所 pp.213-244
- \_\_\_\_\_ (2019)「『食の問題』をめぐる学習活動の実践報告—日本語教育における変容的学習に向けての試み」『比較日本学』46 漢陽大学校日本学国際比較研究所 pp.327-356
- 金志宣・趙宣映(2017)「Moodleを活用した初級日本語授業の実践報告—協働活動を取り入れる試みの提案」『韓国日本研究団体2017年度国際学術大会(第6回) 予稿集』韓国日本学会 pp.213-215
- 倉持香(2010)「協働学習におけるグループ編成に関する考察」『日本学報』84 韓国日本学会 pp.115-126
- \_\_\_\_\_ (2012)「中級日本語会話でのピア・フィードバックの試み—三段階のフィードバックを通して」『日本言語文化』21 韓国日本言語文化学会 pp.168-190
- \_\_\_\_\_ (2014a)「内省活動から見た学習者の情意面と教師の役割—韓国の大学の教養科目における初級日本語学習者を中心に—」『日本言語文化』27 韓国日本言語文化学会 pp.95-116

10) 日本協働実践研究会の池田玲子氏に書いてもらった「推薦のことば」の一部を、そのまま引用する(韓国協働実践研究会 2020)

- \_\_\_\_\_ (2014b) 「教養初級日本語クラスにおける内省活動分析－学習レベルとの違いに焦点をあてて」 『日本語文化』 29 韓国日本語文化学会 pp.198-222
- \_\_\_\_\_ (2018) 「教養初級日本語クラスにおけるピア・ラーニングの一考察－学習者の学習意識の変化に焦点をあてて」 『日本語教育研究』 43 韓国日語教育学会 pp.5-23
- 香月裕介(2011) 「タイ人教師と日本人教師の役割形成から生まれる『つながる』動き－タイ国R大学日本語学科を例に」 『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』 8 国際交流基金バンコク日本文化センター pp.45-54
- 倉持香・奈呉真理(2011) 「韓国における日本語協働学習の課題－研究の実態と学習者意識調査を中心に」 『日本語学研究』 32 韓国日本語学会 pp.33-50
- 倉持香・奈呉真理・関陽子(2015) 「大学教師の日本語学習に対する意識－韓国の教養日本語科目におけるグループワークに焦点をおいて」 『韓国日語教育学会2015年度国際学術大会（第28回）予稿集』 韓国日語教育学会 pp.37-42
- 斎藤明美(2012) 「日本語会話の授業における演劇活動」 『日本語学研究』 35 韓国日本語学会 pp.189-208
- \_\_\_\_\_ (2014a) 「日本語教育におけるグループ学習の導入について－学生の作文とアンケート調査の結果を中心に」 『日本語学研究』 41 韓国日本語学会 pp.83-100
- \_\_\_\_\_ (2014b) 「プロジェクトワーク導入と学習者の意識について－2013年2学期「日本語学の理解」の意識調査から」 『韓国日語教育学会2014年度国際学術大会（第25回）予稿集』 韓国日語教育学会 pp.72-76
- 渋谷博子・伊達宏子・清水由貴子(2018) 「教師の協働を振り返る教師の語りとその分析－SCATを用いて」 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 44 東京外国語大学留学生日本語教育センター pp.65-82
- 辛銀真(2013) 「日本語教育現場の教師間協働に向けた提案－非母語話者日本語教師の内省とその選択から」 『日本文化研究』 46 東アジア日本学会 pp.291-305
- 角ゆりか・大田祥江(2017) 「就職関連授業における協働学習の取り組み－実践報告」 『韓国日語教育学会2017年度国際学術大会（第31回）予稿集』 韓国日語教育学会 pp.151-156
- 関陽子(2017) 「韓国の日本語教育における協働学習研究の動向」 『韓国日語教育学会2017年度国際学術大会（第31回）予稿集』 韓国日語教育学会 pp.24-28
- 高橋雅子・門脇薫・辛銀真・松尾憲暁・中山英治(2012) 「教師間協働の課題と提案－協働体験を持つ教師の内省から」 『立教大学日本語教育センター日本語・日本語教育』 創刊号 立教大学日本語教育センター pp.63-75
- 趙宣映(2018) 「自己調整学習理論に基づく内省ワークシートの活用－話し合いの活性化のために」 『韓国日本語学会2018年度国際学術大会（第38回）予稿集』 韓国日本語学会 pp.241-244
- 中山英治(2016) 「タイにおける日本語教師間の協働モデルの再構築－日本語母語話者教師へのインタビュー調査に基づいて」 『大阪産業大学論集人文・社会科学編』 28 大阪産業大学 pp.75-91
- 中山英治・門脇薫・高橋雅子(2015) 「日本語非母語話者教師と母語話者教師による教師間協働の実態1－タイの高校における協働環境と協働内容」 『いわき明星大学人文学部研究紀要』 28 いわき明星大学人文学部 pp.19-34
- 中山英治・高橋雅子・辛銀真・門脇薫・松尾憲暁(2011) 「教師間協働の過去・現在・未来を語る－国内外の教師間協働の問題点と改善方法」 『早稲田大学日本語教育学会2011年春季大会17回予稿集』 早稲田大学日本語教育学会 pp.9-12
- 奈呉真理(2010a) 「協働学習の問題点－グループ活動の観察」 『日本語文学』 49 日本語文学会 pp.21-44

- \_\_\_\_\_ (2010b) 「協働学習における問題点の克服—初級日本語授業における効果的な導入案」 『日本文化研究』 36 東アジア日本学会 pp.135-155
- \_\_\_\_\_ (2011) 「文字の読み書きを習得する協働学習」 『日本語学研究』 30 韓国日本語学会 pp.139-155
- 藤原文雄(1998) 「教師間の知識共有・創造としての『協働』成立のプロセスについての一考察」 『東京大学大学院教育学科研究科教育行政研究室紀要』 17 東京大学大学院教育学科研究科 pp.2-21

#### <付記>

本稿は、『韓国日語教育学会・協働実践研究会（日本）共同開催2019年度冬季国際学術大会』における企画発表「韓国協働実践研究会における教師間協働—『協働学習の授業デザインと実践の手引き』作成の試み」に加筆・修正を施したものである。

## &lt;요지&gt;

## 일본어교육에서의 교사 간 협동

- 한국 협동실천연구회의 집필·출판 사례 -

본고는 한국에서의 일본어교사 간 협동에 관한 사례보고이다. 한국 협동실천연구회의 회원에 의한 공저 『협동학습의 수업디자인과 실천을 위한 입문서』(『協働学習の授業デザインと実践の手引き』)의 집필·출판 과정을 통해 교사 간 협동의 실천 사례를 소개하고자 한 것이다. 우선 협동실천연구회에 대한 소개와 연구회의 활동내용을 간략히 정리하고 본서의 집필·출판 경위에 대해 살펴보았다. 본서는 협동학습 수업에 있어 고려해야 할 요소에 관한 「제1부. 협동학습 이론편」, 일본어수업의 실천 사례를 소개한 「제2부. 협동학습 실천사례편」, 한국의 중등·고등 교육기관에서의 일본어 협동학습에 관한 실천연구를 개관한 「제3부. 협동학습 실천연구편」으로 구성되며, 협동학습에 대한 이해를 높여 협동학습의 수업디자인과 실천이 가능해지도록 조력하는 것을 목적으로 집필되었다. 또한 본서의 활용을 위한 발신 방안을 PDCA사이클로 제안하고 이를 연구회 전체 활동 속에서 조망함으로써 향후 연구회를 통한 교사 간 협동의 지속적 발전을 위한 과제에 대해 시사를 얻을 수 있었다. 이와 같은 실천지(實踐知)의 공유·창조 프로세스로서의 교사 간 협동 사례보고를 통해 또 다른 교사 간 협동방안을 모색하는 실마리를 제공할 수 있을 것으로 기대된다.

논문분야 : 일본어교육

키워드 : 교사 간 협동, 실천지, 한국 협동실천연구회, 『협동학습의 수업디자인과 실천을 위한 입문서』

■ 김지선(金志宣)

이화여자대학교 부교수

jiskim@ewha.ac.kr

■投稿日	:	2020년	1월	14일
■審査開始	:	2020년	2월	5일
■審査完了	:	2020년	2월	19일
■掲載確定	:	2020년	2월	28일